長い指短い指

永代美知代

『花子さん、一寸あなたお足を拜見な。』

すぐ傍に並んで坐つた從姉のリボンを一寸直して信枝さんは思ひ出したやうに云ひました。

庭の若葉を渡つて、初夏の風がネルの着物に心地よい。

『まあ、あなたのお足は好い形ねえ。』

信枝さんが讃めますと、花子さんは恥かしさうに、周章てゝ足を引込めました。

『アラ嫌だ、こんな汚い足！』

『うそ、もう一度よく拜見な、汚い、汚いつて、私そんな事を見てるんぢやないわ、指の形でね、その人の運不運が解るのよ、だからお見せなさい、見てあげませう。』

『アラさう、だけども私、屹度不運に定つてゝよ。』

『どうして、先刻一寸と見たところぢや、大變よさ相だつたわよ。』

『ぢや見て頂戴な、その代り邦子さん、あなたもあとでね。』

同じ從姉同志の邦子さんを振り向きながら、花子さんは無邪氣にお足を出しました。ですが、信枝さんにじつと見据ゑられると、鬼が出るか蛇が出るかといつた風に思はず不安の胸を轟かせました。

『花子さん、あなたは大變な御出世よ。』

つくづくと見入つてゐた信枝さんは、感に堪えたと云つた調子で云ひました。

『御覽なさい、その證據にはね、これ、こんなに中高指が長いでせう、ね、こんなに中高指が拇指の先からずつと突き出た方は、親よりも產れ上つてる人ですつて。』

『まあ嬉しい！』

花子さんの瞳は希望に輝きました。

『だけども信枝さん、それまつたくなの？』

『えゝえ、本當ですとも、うそだと思ふなら、誰にだつて聞いて御覽なさい、昔からの云ひ傳へよ。』

『さう。』

『私ね、うちのお姿樣から聞いたのよ、そらね、私も出世するのよ。』

云ひながら信枝さんは自分の足を差出しました。

『まあ、あなたもお長いわね。』

『だけども私のはあなたの半分位しかないわ、だから、あなたの半分しか出世が出來ないかも知れないわ。』

『まさか。』

併し花子さんは內々得意で堪りません。信枝さんの中高指は拇指の上から、ほんの一分五厘かそこいらしか出ては居ませんが、花子さんのは確に其倍以上の長さがある。』

『ね花子さん、あなた大きくおなりなすつたら、何になるおつもり？』

『さうね、學校の先生も可いわね。』

『私も女學校の先生になりますわ。』

『アラ、私女子大學の先生よ。』

二人は幸福な未來を夢みて、思はずにつこり微笑み交しました。ふと花子さんは氣がついて、

『ね、邦子さんは其時分何になつていらつしやるでせうね、あなたもお足を拜見な。』

『駄目ですわ私！』
力のない悄氣切つた聲で、邦子さんは答へました。
『如何して？』
『駄目だなんてそんな事があるもんですか、ね邦子さん、あなたも何か偉いものにおなんなさいよ。』
花子さんと信枝さんと二人で云ひました。
『だつて、だつて駄目なんですもの……』
先刻から内々で、そつと足の形をしらべてゐた邦子さんは、如何したつて幸運な從姉達の中へ、中高指の短い足を出して見せる氣にはなりませんでした。邦子さんはとうとう涙ぐんだ眼を打伏せました。
『如何なすつたの、まあ一寸拜見てば。』
無理矢理邦子さんにお足を

出させた二人は、氣の毒さうに云ひました。
『まあ、本當に駄目なのね。』
『邦子さんは御出世なさらないのかしら』
綺麗に洗つた白い邦子さんの足を見詰めたまゝ、今更のやうに太息をつきました。
『どうせ私は女中になつて死ぬかもしれないわ。』
微かに笑ひながら云ひましたけれども、邦子さんの聲はひどく震えて居りました。
『可いわ邦子さん、あなたが女中になつたら、私の家へいらつしやいな、私屹度大事によく御世話してあげますわ。』
年下の花子さんは何の氣もなく云ひました。ですが邦子さんはなほ更ら心細くなりました。
『そんな事云ふものぢやなく

つてよ。』
信枝さんがそつと花子さんの袖を引きましたけれども、もう追付きません、淋しい〳〵顏の邦子さんは默つて立つて御自分の部屋の方へ行きました。

邦子さんは机の前へ坐ると、そのまゝ兩方の袂で顏を覆ひました。邦子さんの胸の中は、かきむしるほど無遮苦遮して、亂れに紊れ切りました。
まさかとも思ふけれども、ナポレオン大帝の皇后ジヨセフキンが、娘の頃、人相みのお婆さんから手相を見られて、『あなたは屹度皇后におなりなさると豫言され、それが本當に當つた例もある……と思ふと、昔からの云ひつたへとか、手相足相など信じないではゐられないやうな氣にもなつて來るのでした。
邦子さんは、忌々しさうに今一度中高指の長さを調べました。
『オヤー』邦子さんは思はず聲高に叫びました。
先刻まで中高指の長い花子さんと反對に、拇指から二分も低かつた中高指が、何時の間にやら、拇指とすりきり一杯位になつて居るのです。
不思議に思ひながら、じつて見据ゑて居りますと、中高指は一分、一分五厘、二分、二分五厘と、次第に長くなるばかりです。
『うれしい！　私も女の博士になれるんだ。』
邦子さんの口元に淋しい笑が浮びました。ですが邦子さんのその嬉しい顏付は、見る間に眞蒼に變り

ました。

『オヤ！』

折角長くなつて嬉しいと思つたのは束の間で、今度は反對に長いのを苦勞にしなければならなくなつたのです。

そつと延び切つた中高指を觸つて見ますと、まるでゴムの管か何かのやうに、ぶらり〳〵垂れさがつてゐるのでした。

邦子さんは心から溜息をつきました。

『僅か三分たらず中高指の長い花子さんが女子大學の先生になれるんだもの、私はこんなに一尺五寸も長くつて、何になるんだらう？　畏れ多いけれども宮樣の妃殿下か――それとも外國の王樣のおきさきか――』

こんな空想にふけつてゐた邦子さんは、ハッと顏をあからめました。

『嫌だ、嫌だ、そんな不具者のお妃があつてたまるものぢやない！　私は何と云ふ空想家なんでせう？』

つく〳〵なさけなくなつて、今一度不快な指を見詰めますと、不思議や、中高指は拇指から小指まで ずつと順々に低くなつてゐるではありませんか。

『まあ、ありがたい！』

邦子さんはもう何等の不平もありません、短かくたつて、長くなくても、そんな事は如何でも可い、やつぱり元々通り自然の儘のが一番だと思ひました。

『その代り私は、花子さんや信枝さんにまけないやう、誰よりも眞面目に勉强して、大人になつてからまごつかないように、心掛けなくつちやならない、指の長い短い位で、馬鹿々々しい心配をしたり、あてにもならない運不運に氣をくさらせて、泣いたり笑つたりしてる場合ぢやない、それこそ今のうち一生懸命何彼に氣をつけて勉强するのが一番好い。』

斯う思ふと、邦子さんは今までの無遮苦遮がからりととれて、すが〳〵しい氣持になりました。

庭の何處かで駒鳥が鳴いて、丸窓近い楓の若葉が希望の色に輝いて見えました。（をはり）